

論文の内容の要旨

論文題目 Talmyの類型論から見た日本語と韓国語の様態表現－複合動詞を中心に－

氏 名 宣吹貞

本稿では、Talmyの類型論ではV言語として分類される日本語と韓国語が、移動の様態に注目すると、非主要部によって様態が表されやすい言語である可能性を指摘した。両言語では、典型的なV言語であるスペイン語とは違い、主動詞以外の選択肢が複数あるものがあり、中には主動詞との結びつきが強い動詞的表現もある。先行研究では、節同士の結びつきが強いと情報の背景化が進み、その頻度は高いとしているので、両言語の移動事象でも、主動詞との結びつきの強い非主要部で表される様態の頻度は高くなると予想した。その結果、概ね予想通りの結果となったが、一部の使役移動では一致しない結果も見られた。

第1の検証では、英語の自律移動に対応する日本語と韓国語の様態表現は、主要部における様態が少なく、非主要部の様態が多かった。両言語の様態表現は英語より少なかったものの、非主要部の様態に限ってみると、両言語の頻度は英語より多かった。しかし、両言語の非主要部による様態表現では、主動詞との結びつきが強いものは少なかった。一見、両言語の様態表現が主動詞との結びつきとは関係なく表されることを意味するようにも見えたが、複数の事象が連なる物語の特徴を考えると、主動詞との結びつきが強い両言語の非主要部でも、主動詞ではない後項動詞を強いられている例は、主動詞との概念的な結びつきが強いと見なすべきであろう。その結果、両言語の非主要部の様態では、主動詞との概念的な結びつきが強いものが多いことが分かった。

両言語の非主要部で様態が表される例が多い要因としては、非主要部の様態が果たす様々な役割が考えられ、本論では様態の中立化や様態の上位カテゴリー、別の移動の側面の提示、意味の拡張を取り上げた。いずれにしても、様態の副詞を設けることによる負荷を回避しながら、かつ英語の様態の詳細にも対応しようとする戦略であるが、道具や速度のような特定の様態の副詞については、非主要部の動詞での対応が難しいため、負荷がかかっても回避しない例も見られた。

第2の検証では、英語の使役移動に対応する日本語と韓国語の動詞の表現を検証した。両言語の使役移動の様態表現は、移動の経路と共に現れることができるが、複合動詞の前項動詞という個別言語の特徴を考慮すると、主動詞と同程度に表されやすいと予想した。ただし、使役移動の様態より手段の方が主動詞との結びつきが強く、その分頻度も高いと予想した。その結果、予想した通り、非主要部の様態より非主要部の手段が多かった。非主要部の手段では、主動詞との結びつきが強いものが少なかったが、使役移動でも事象の連続性を考えると、主動詞との概念的な結びつきが強いものが少なくないことがわかった。両言語において使役移動の様態より手段の方が多いのは、使役移動が自律移動とは違い、図（非使役者）に対する使役者の働きかけがあるので、移動の経路だけでなく移動の情報をも明示するとしたら、それは使役者による働きかけであることが妥当で、図による移動の様態は重要度が低いためであろう。つまり、非使役者による移動の様態が表されにくい側面がある可能性が示唆される。

両言語において非主要部の手段が多い要因としては、継続操作型と開始時起動型の使役移動が考えられる。英語の随伴運搬型に対して、両言語では自律移動で対応しており、使役移動を継続操作型と開始時起動型で対応している。両言語の継続操作型と開始時起動型は、使役の行為で分類したものであるため、使役移動の様態というより使役の手段に当たり、両言語で非主要部の使役の手段が多いという結果にもつながるのだろう。その際、経路動詞が見られない場合はあるものの、使役行為を非主要部で対応し、主動詞との結びつきが強い非主要部での対応が多かった。

しかし、両言語の使役移動では、使役の手段でも移動の様態でもない「その他」が多く、非主要部の手段より多かった。本稿では、「その他」として、①活動動詞、②図や地の情報が含まれた動詞、③自律移動の動詞を取り上げた。まず、活動動詞は継続操作型の使役移動からの拡張でよく見られるが、使役者の身体部位による小規模の移動や被使役者が移動後もなお使役者の手の中にある継続操作型の側面が活動動詞と類似しているため、両言語で用いられていると思われる。次に、図や地の情報が含まれた動詞は、英語の使役移動における図や地の情報に注目して対応しているので、同じ英語の使役動詞に対しても、異なる図や地の情報で対応したり、異なる英語の使役動詞に対して同じ図や地の情報で対応していることがわかった。最後に、自律移動の動詞は、英語の随伴運搬型の使役移動への対応によく見られた。特に、英語の使役的直示動詞への対応では、自律移動での対応が目立っていた。いずれにしても、「その他」での対応は、限られた両言語の使役手段動詞を補うために用いられていると思われる。

第3の検証では、英語の使役移動に対応する日本語と韓国語は、使役移動の様態と手段の両方が複合動詞の前項動詞と後項動詞に分けて表されている場合は殆どなかった。その要因として、両言語の経路動詞での対応と経路動詞との組み合わせが挙げられるが、使役移動の様態でも手段でもない「その他」の動詞も含めると、被使役者に対する働きかけの詳細化が見られた。しかし、実際の頻度としては、英語の使役移動を経路動詞で対応したり、経路動詞との組み合わせで対応する場合が多かったため、働きかけの段階の詳細化は理論上の可能性の一つにすぎないとも考えられる。